

## 序 言

『言語と文明』第9巻が刊行の運びとなりました。編集の任に当たられた岩佐信道編集長をはじめ編集委員および査読委員各位に感謝申し上げますとともに、ご寄稿頂いた諸先生、院生に御礼申し上げます。ここには、言語教育研究科長を務められた坂本比奈子名誉教授の研究ノートも含まれており、活発な研究を続けておられることに敬意を表します。

言語教育研究科において7年間に亘り教育に携わってこられた中右実教授が、めでたくご定年を迎えられました。先生のエッセイ、略歴、主要業績を本誌に掲載させて頂きました。

この『言語と文明』に掲載されている院生の論文や研究ノートは、言語教育研究科の複数の教員による厳しい査読を受けていますが、お読み頂いた皆さまから、忌憚のない建設的なご批判をお寄せ頂きたく存じます。

『言語と文明』第1巻(2003年)には、伊東俊太郎教授(現・名誉教授)の「文明」と「文化」に関するエッセイが掲載されています。その中で、「比較文明文化研究は、さまざまな文明文化が一つの地球上において生き合っただけで済まなければならない今日の状況に即して、その多様な文明文化の独自性を認識しつつ、比較研究を通して、その間に相互理解の橋を架け、人類共通の課題に挑戦し、よってもって地球社会の調和ある発展に寄与しようとするものである。」と述べておられます。この考えは、2008年から2010年にかけて刊行された『伊東俊太郎著作集』(全12巻、麗澤大学出版会)の第9巻『比較文明史』の「現代文明と環境問題」にも読み取ることができます。この著作集は、伊東先生の研究の集大成であり、学問研究を志す者の正に踏破すべき秀峰と申せましょう。

ところで、『言語と文明』第1巻は2003年3月に刊行されましたが、当時の言語教育研究科長はタゴール賞に輝いた我妻和男教授(インド哲学の泰斗、現・名誉教授)で、その「発刊に当って」の中に、「研究には、広い視点と専門的高度の知識と独創性が社会的に広く求められる」と書いておられます。大学評価・学位授与機構や大学基準協会では通算6年ほど評価委員を務めた私の経験からも、外部評価や科研費の申請等では、独創性や新規性のある学術論文であるか否かが問われるので、とくに院生の皆さんには、十分に時間をかけた優れた論文を執筆し寄稿するように期待しています。

2011年3月

言語教育研究科長 石塚茂清